

野宿経験のある生活保護受給者のコミュニティの育成

釜ヶ崎居住COM
(大阪府大阪市)

I. 活動の背景と目的

大阪市西成区釜ヶ崎では、従来からさまざまな支援団体が、ホームレスや日雇労働者問題に対して就労面や医療面を主体に個別に活動を展開してきた。このなかで当グループは、ホームレス問題の根本的解決のためには安定した居住の保障が最優先課題であると位置づけ活動を重ねてきた。しかし現実には、ホームレス問題は多分野にわたる総合的問題であり、その解消のためには地域住民や諸団体の活動が有機的につながることが最も有効な手段である。そこで、町会、簡易宿泊所経営者、地域施設職員、N P O、各種宗教・運動団体、生活保護受給者支援団体、学生、学識経験者などに呼びかけ、1999年10月に「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」を結成し、ワークショップやフォーラムなどの手法を用いて、釜ヶ崎労働者を含む地域住民や諸団体との情報交換やまちづくりビジョンの共有化を試みてきた。

このような取り組みの結果、まちづくりビジョンに賛同する簡易宿泊所経営者の協力を得て、簡易宿泊所を「サポートイブハウス」に転換し、野宿生活者が生活保護を活用して生活再建と地域社会への定着を行なうための基盤となる住宅を整備することができた。「サポートイブハウス」には、野宿生活者が生活保護を受給して生活を営み地域社会に定着することを支援するために、さまざまなサービスや工夫が整えられている。例えば、居室の狭小性を緩和し部屋にこもりきりになることを防ぐために共同リビング（談話室）を設置し、レクリエーションやイベント、セミナー、昼食会などに利用されている。また、高齢者に配慮して手すりや洋風便器を設置するなど一部をバリアフリー対応としている。さらに、従業員が24時間常駐し、個々の居住者の状況に応じて必要な生活相談や生活支援を実施している。支援の内容は多岐にわたり、たとえば、生活保護申請手続きの介助、金銭管理、安否確認、居室や共用部分の清掃、サラ金問題の相談、服薬時間の管理や見守り、入居者同士のトラブルの仲裁、入退院手続きの介助や入院中の見舞い、介護保険の相談、居住者のためのサークル活動やイベントなどの企画・運営などがある。入居時には敷金・礼金や保証人を必要とせず、場合によっては生活保護が支給されるまでの家賃を後納や分納できるようにするなどの配慮をしている。

現在までに、6人の経営者によって計9軒の「サポートイブハウス」が運営されており、約1,000人の野宿生活者が生活保



釜ヶ崎夏祭りにて屋台を出店するサポートイブハウス居住の高齢者たち（野宿経験者）とボランティア連絡会の人々



菜園づくりに励むサポートイブハウス居住の高齢者たちとボランティア連絡会の人々

護を受給して生活している。内1軒の「サポーティブハウス」では、一部を利用してアルコールによる精神障害者のグループホームが設立認可されている。

住宅保障に次いで私たちが目指したのは、居住者が地域で安定して暮らしつづけるためのまちづくりである。まず、初期に開設した3軒の「サポーティブハウス」が立地する街区を「野宿生活者の社会復帰を実現するモデル地区」と位置付け、居住者が地域で暮らし続けるために必要な施設やサービスなどを整備することを試みた。この活動は、第9回「住まいとコミュニティづくり活動助成事業」の助成を受け、「釜ヶ崎地域の高齢生活をささえる会」や「地域通貨流通促進委員会」などの分科会的新団体の設立につながった。「釜ヶ崎地域の高齢生活をささえる会」では、「サポーティブハウス」の経営者や福祉関係者、医療関係者を中心に、毎月1回、高齢者や障害者の生活課題に関する勉強会を開催し、介護問題や健康維持、アルコール問題などについて検討している。「地域通貨流通促進委員会」では、地域通貨を導入して「生活づくり」「コミュニティづくり」「仕事づくり」を支援することを目的に、地域通貨の流通に向けて広報活動や流通経路の開拓を行なってきた。2001年11月に地域情報誌『やりとり百貨』を創刊し、本格的な流通が進行中である。さらに、当事者の生活づくりやつながりづくりを支援するためには釜ヶ崎地域に精通した優秀な人材を確保することが必要であることから、2001年11月に第1回「釜ヶ崎ボランティア養成講座」を開講した。

まちづくり運動の本格化にともない、「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」には、より高い判断力、構想力、提案力、行動力が求められており、2002年度はとりわけ以下の3つの重点目標を設定して活動を展開していくこととした。一つは、野宿生活経験のある生活保護受給者の生活づくりにおけるニーズを把握し、それへの対応を図ることである。二つ目は、地域通貨の完全定着化をはかり、円滑・潤沢な流通によってコミュニティの形成を支援することである。三つ目は、運動基盤と事業基盤を補強し拡大していくことである。特に初めの二つについては、具体的な活動目標を6点定め、実施した。

II. 活動の内容

2-1. 「サポーティブハウス」居住者の居住意識・ニーズの調査

「サポーティブハウス」のサポート体制が、生活づくりの行程にどのような影響を与えていているのか、その効用・効果や課題を把握し、そのノウハウを地域に広げることが重要である。また、「サポーティブハウス」には、地域社会で自立した生活を望む者から痴呆やアルコール依存のために特別なケアを必要とする者まで幅広い階層が居住しており、各居住者の居住ニーズに応じた支援体制づくりが求められている。そこで、「サポーティブハ



第3回釜ヶ崎ボランティア養成講座では、当事者組織「つきみそうの会」を軸にして、高齢者訪問支援コースも専門コースの中に設けた



トーキングをリードする居住保護当事者の皆さん
野宿時代やアパート暮らしのこと、
仲間同士の助け合いのことなどを語る



サポーティブハウス居住者意識実態調査の経過報告をするメンバー

「サポーティブハウス」居住者に対して面接聞き取りをし、入居までの経緯、入居後の生活状況、将来展望などを調べた。調査は、居住支援研究委員会（住宅総合研究財団2001年度研究助成対象。委員に当グループのメンバーを含む）との共同で2002年4～5月に実施した。6軒の「サポーティブハウス」居住者約670人のうち、71人（46歳～82歳、男性67人、女性4人）から聞き取りを行うことができた。

調査の結果、1)居住者の大半が高齢で健康面に不安を抱えている、2)飯場や簡易宿泊所など非住宅での生活経験が長く家事や家計管理の経験・知識が乏しい、3)生活保護が金銭的制約・心理的抑制となりより高い次元への生活の質の向上を果たすことが困難になっている、などの居住者像が明らかになった。生活再建の過程では、「サポーティブハウス」の人的サポートが大きな役割を果たしており、居住者もこれを高く評価していた。また居住の安定によって健康状態の改善が見られたほか、社会奉仕など新しい生活要求が発生していた。しかし一方で、集団生活や地域社会になじめず生きがいを喪失している人もいた。

「サポーティブハウス」は野宿生活者の居住支援の取り組みとして一定の成果を上げているが、人材や資金的な条件などからその機能には限界がある。今後深刻化すると思われる介護問題や精神的ケアなどへの対応を含め、「自立」と結合した居住支援を推進するためには、公的資金の投入などの検討が必要であることが確認できた。

これらの調査結果については、2002年7月20日および2003年1月13日に地域で報告会を開催し報告した。

2-2. 地域通貨流通の振興

釜ヶ崎の地域通貨「カマ手帳」は、2001年11月から本格的に導入され、「サポーティブハウス」居住者を中心に約250人が利用登録している。今年度は、地域通貨をさらに地域に定着化させるために、専任の地域通貨流通コーディネーター（有償）を配置し、地域情報誌の発行や各種団体への広報活動、地域通貨を利用したイベントの開催などを行なってきた。コーディネーターには、ボランティア養成講座の修了生などが登録している。

地域通貨の流通を促進するためには、「地域通貨を獲得する場」と「地域通貨を使う場」の双方を整備する必要がある。釜ヶ崎の地域通貨の課題は、登録者の大半が「サポーティブハウス」の居住者であり、各人の「できること」「して欲しいこと」が類似しているため、地域通貨の取引に多様性がないことである。また、日雇い労働に長く従事し特に特技や技術を持たないために、「できること」が見つからない登録者も多い。そこで、コーディネーターが中心になって、「地域通貨を獲得する場」と「地域通貨を使う場」を創出することに努めてきた。具体的には、1)季節的イベント（料理教室、菜園づくり、車イス花見など）、2)



年末カマ通貨大感謝祭にて



バザーで地域通貨を使う様子



第3回釜ヶ崎ボランティア養成講座でのワークショップ



釜ヶ崎ボランティア養成講座
フィールドワークコースの人々

「サポートハウス」内の定期的な文化活動など(モーニング喫茶、ヨガ教室、足裏マッサージなど)、3)「金曜作業日(依頼された仕事や地域に貢献する目的で作業を行う)」、などを開催している。「金曜作業日」では、これまでに、ワールドカップの決勝戦を彩る折鶴づくり、識字教室のポスターづくり、地域通貨情報誌『やりとり百貨』の製本、牛乳パックを利用した筆立てや折箱づくり(近隣の施設に寄贈)、地域情報誌としての壁新聞の発行などを行った。6月には「カマやんうちわ」(釜ヶ崎のまち再生フォーラムのまちづくりビジョンのイラストを使用したうちわ)を作成した。金曜作業日は、地域通貨を通して「サポートハウス」の居住者同士や居住者と地域の子供たちが接する場を提供しており、日々の単調な生活に刺激を与えるなど、高齢者の生きがいづくりにも役立っている。また、昨年度に続き今年度も釜ヶ崎夏まつりにソーメン屋台を出店し、地域の諸団体や住民に地域通貨をアピールした。12月にはバザーやお楽しみ会を兼ねた「カマ通貨大感謝祭」を開催した。

2-3. ボランティア養成講座の運営

昨年度から始まった釜ヶ崎ボランティア養成講座は、釜ヶ崎の現状の理解を深め、まちづくり活動の技法を学ぶと共に、講座修了後は当グループをはじめとする釜ヶ崎のまち再生フォーラムの構成団体に参加したりあるいは独自に活動グループを編成して、まちづくり・住まいづくり活動を企画・実践することを目的としている。

今年度は、より専門的な知識や技術を習得してもらうために、「共通コース」と「専門コース」に分けてプログラムを作成し、12月～2月にかけて講座を開講した。専門コースには、「高齢者訪問活動支援ボランティア養成コース」「高齢者のニーズほりおこしコーディネーター養成コース～自助具づくりの小規模作業所づくりをめざして」「地域通貨流通コーディネーター養成コース」の3コースを用意した。「高齢者訪問活動支援ボランティア養成コース」は、釜ヶ崎のまち再生フォーラムと関係の深い、当事者たちの自助組織である「つきみそうの会」を軸にすえて開設したコースで、同団体が実施している安否確認訪問事業を支援するものである。

年末ということもあって参加者は昨年度よりも減少し26名であったが、熱心な受講生が多く、さっそく自主活動グループが生まれ、さまざまな企画を提案し実行している。

2-4. ボランティアセンターの設立

上記の釜ヶ崎ボランティア養成講座と関連して、講座修了生など釜ヶ崎におけるボランティア活動に関心のある人を受け入れる窓口を早急に整える必要があった。このため、2002年春に、地域内の各種団体に対して、ボランティアの必要の有無やボラ

ンティアに求める必要な技能・知識などについてアンケートを実施した。アンケートの結果は、講座修了生に情報として提供したり、今後の講座のプログラム編成に際しての資料とするなど活用した。

また、講座修了生からなる釜ヶ崎ボランティア連絡会が設立された（現在の登録会員は約80名）。釜ヶ崎夏まつりへのソーメン屋台の出店は、釜ヶ崎ボランティア連絡会と地域通貨委員会の合同企画として実施したものである。このほか、車イス花見や菜園しごとなどの各種イベント、識字教室の運営にも釜ヶ崎ボランティア連絡会が携わっている。

2-5. 識字教室の開設

「サポートハウス」居住者の中には、読み書きのできない者もあり、これが円滑なコミュニケーションの妨げや当人の劣等感を生む原因になっていることがある。そこで、第1回釜ヶ崎ボランティア養成講座の「識字教育コース」修了者などが中心となって、「サポートハウス」居住者等に識字教育を実施することとした。2002年3月2日に「ともにあゆむ釜ヶ崎識字教室（もじろうかい）」を開校し、以後毎週土曜日の午後に、釜ヶ崎内にある「太子福祉館（まちづくり活動に理解のある簡易宿泊所経営者によって開かれた地域交流室）」で活動している。メンバーに多少の入れ替わりはあるが、毎回10人前後の当事者と5～6人のボランティア（今年に入ってから参加者はさらに増加）が参加している。

ここでは、狭い意味での「識字」だけでなく、自己表現活動全般を視野に入れたエンパワーメント活動が可能になることを目標に、取り組みを進めており、教室の前半は識字、後半はワークショップを行なっている。このような活動を通して、当事者同士が互いに相談したり情報を交換する「ピアカウンセリング」の動きも現れてきている。

2-6. ホームページ英語版の開設

従来から釜ヶ崎には、JICA研修生などが見学に訪れることがあったが、今年度は、アメリカやイギリスのホームレス問題に関する諸団体との交流があり、釜ヶ崎におけるまちづくり・住まいづくり活動をこれらの国々に広く広報する必要性が出てきた。昨年度の助成金で日本語版ホームページを開設したので、これをベースにして英語版を作成することとした。

日本語版ホームページをたたき台にした英訳作業を5月までに行い、数度の英訳チェックや試行を繰り返し、最終的には11月にホームページ英語版を開設することができた。

III. 活動の効果及び今後の課題

私たちが上記のような活動を行なう中、折しも、「野宿生活者



「投票へ行こう！ 社会再参加キャンペーン」の公開討論会

の社会復帰を実現するモデル地区」を含む地区に新しく町会が誕生した。町会役員には「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」のメンバーも多く含まれている。町会誕生の背景の一つには、「サポーティブハウス」ができたことによって多数の野宿生活者等が住民として地域に定着してきたことがある。余談ではあるが、先の統一選挙において、他校区では軒並み投票率が落ちた中、「サポーティブハウス」が立地する萩之茶屋校区のみが投票率が上昇した。このことも、野宿生活者等が地域住民として定着してきていることの証左と言えるだろう。

町会の発足によって、本格的なまちづくりに取り組む土台ができたといえる。また、「釜ヶ崎ボランティア養成講座」や「釜ヶ崎ボランティア連絡会」によって、優秀な新しい人材も集まりつつある。

一方で、旧来から釜ヶ崎に居住している住民や近隣の町会との関わりが薄いことが課題となっている。また、活動が広がり組織が大きくなるほど、多数の意見を聞き取り集約することが困難になってきた。そこで、2003年度からは、地域のN P Oや団体をつなぐ「N P Oアライアンスづくり」、地域づくりを包括的に考える「ネクストステージビジョンの作成」、きめ細かく地域のニーズを探るための「ききとりキャラバンの実施」を行うこととした。さらに、西成区の地域福祉計画やホームレス自立支援法などを視野に入れて、さまざまな活動を展開していく予定である。

今後の課題としては、これらの事業を展開していくための、人材と資金の確保があげられる。N P O化の検討も行なっているが、いずれにせよ、資金や人材などの点で課題がある。



「もしも西成市民会館を立て替えるとしたら？」ワークショップの様子 1



「もしも西成市民会館を立て替えるとしたら？」ワークショップの様子 2

<団体活動データ>

■釜ヶ崎居住COM

活動テーマ	野宿経験のある生活保護受給者のコミュニティの育成
活動目的	人間の人間たる根本に居住があるという考えのもとに、釜ヶ崎の労働者、元労働者、野宿者等の居住支援を目的に、調査、政策提言等を行う。
設立年月	1997年9月
代表者名	星野智
活動地域	大阪市西成区
メンバー	15名 団体職員、研究員、コンサルタント、大学教授等

●団体設立の経緯

「国連人間居住会議 HABITAT2」宣言（1996年、イスタン布尔）についての学習会がきっかけ。従来から釜ヶ崎では、支援分野として就労や福祉、医療は呼ばれていたが居住の観点は乏しかった。釜ヶ崎の野宿問題を居住面から探る調査、政策提言活動を行うために、（財）西成労働福祉センターの職員、住宅問題やまちづくりの専門家、大学院生などが核として集まり設立された。

●活動地域図（活動位置図）



●これまでの活動

釜ヶ崎で労働者支援、野宿者支援を行っている団体は数多くあるが、どちらかというとそれぞれが独自に活動していて横の連携がなかった。そこで発生する問題は、多分野にわたる総合的な問題であるとの認識のもとに、釜ヶ崎居住COMが呼びかけ、各支援団体、宿泊所経営者、町会、学識者を横断的に結びつける「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」を立ち上げた。同フォーラムから生まれた様以下の様々な活動を行っていった。

・フォーラムの開催

「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」を1999年10月から2001年6月まで、計10回開いた。地域の各主体が集まり、情報交換、まちづくりビジョンの共有化を行った。第10回目には、老朽化した西成市民館の活用ワークショップを開いた。

・サポートハウス

フォーラムを開催してゆく中で、まちづくりビジョンに賛同する経営者の協力を得られた簡易宿泊所を、サポートハウスと名づけた入居後のサポート体制を付したマンションに転換した。マンションに転換することで生活保護者の居宅保護が可能になり、また経営者にとっても増加しつつあった空き部屋対策になる。2002年3月までに9軒のサポートハウスが誕生した。

・地域通貨「カマ」の流通

「生活づくり」「コミュニティづくり」「仕事づくり」を支援することを目的に2001年11月情報誌「やりとり百貨」発刊を機に本格的に導入した。

・ボランティア養成講座の運営

釜ヶ崎の現状の理解を深め、まちづくり活動の技法を学び、講座終了後は釜ヶ崎で実際にまちづくり・住まいづくり活動を企画・実践する人材の育成を目的としている。また、修了生によってボランティア活動を受け入れる窓口として「釜ヶ崎ボランティア連絡会」が設立された。

・識字教室の開設

サポートハウス入居者で文字の読めない人への識字教育の場として開設した。

・調査・研究・提言

「緊急アピール：釜ヶ崎に人間居住を実現するための緊急策と抜本策」

簡易宿泊所空き2000室活用プラン」の提案

サポートハウスの居住者の居住意識・ニーズの調査。



サポートハウス



地域通貨情報誌

●助成対象活動

2002年度は1)野宿生活経験のある生活保護受給者の生活づくりにおけるニーズを把握し、それへの対応を図る。2)地域通貨の定着を図る。3)運動基盤と事業基盤を補強し拡大していく。の3つの重点目標にして以下の活動を行った。

①ニーズ調査

2002年4~5月 「サポートハウス」居住者の居住意識・ニーズの調査

7月20日 調査の報告会の実施

②地域通貨の振興

地域通過を使う場、獲得する場として「料理教室」「菜園づくり」「車イス花見」サポート内での文化活動（ヨガ教室、足裏マッサージなど）「金曜作業日」の開催。

2002年6月 釜ヶ崎夏まつりにソーメン屋台の出店。地域通貨のアピール

12月 バザーとお楽しみ会を兼ねた「カマ通貨大感謝祭」の開催。

③ボランティア養成講座の運営

今年度は「共通コース」と「専門コース」に分けてプログラムを作成し、2002年12月~2月に実施。

④ボランティアセンターの設立

ボランティア養成講座の修了生など、ボランティアを受け入れる窓口として設置。

地域内各支援団体にボランティアについてのアンケートを実施。

講座終了生からなる「釜ヶ崎ボランティア連絡会」の設置。

⑤識字教室の開設

第1回ボランティア養成講座の修了生が中心となって「ともにあゆむ釜ヶ崎識字教室（もじろうかい）」（2002年3月開設）を毎週土曜日に開校。

⑥ホームページ英語版の開設（2002年11月）

●これからの予定

地域のNPOや団体をつなぐ「アライアンスづくり」、地域づくりを包括的に考える「ネクストステージビジョンの作成」、きめ細かく地域のニーズを探る「ききとりキャラバンの実施」を行う予定。